よりよき生活と平和のために

～願いを寄せ合いみんなでつくった50年～

生協コープかごしまの歩みには、
組合員の願いである“よりよき生活と平和”を
守り、育ててきた多くの人々の地道な活動がありました。
このコーナーでは、歴代の副理事長、副会長や常勤理事、
各分野の活動に携わった方々、
創立時の職員や職員OB会「協友会」世話人の方々に、
当時の思い出等を寄稿いただきました。

元副理事長

田尻 美代子

27年前の大規模洪水

鹿児島県内の河川には大規模な洪水等は起こらないと1993年8月6日まで思っていました。鹿児島は直ぐ北に九州山地が迫り目の前には錦江湾や太平洋が拡がる狭い陸地に住んでいるからです。

だがしかし、93年の気象状況は今年とよく似て、いつまでも梅雨明けはなく7月末から8月にかけて台風が幾つも発生。遂に甲突川、稲荷川、新川が氾濫。3号線も10号線も車は立往生。コープの車も巻き込まれて職員は船で救助された。五石橋崩落。西田橋近くの城西店は、2メートル以上浸水、辛うじて店長は天窓から脱出。その後も取水施設損傷で、断水が続き組合員の生活は困難を極めました。

あれ以来、災害時の共助の仕組みや危機に備えての体制作りは既に作られていると思いますがコープかごしまの組合員が生き生きと安心して暮らせるように今後もがんばって下さい。
創立50周年誠におめでとうございます。

ＩＣＡ東京大会参加の海外代表とおはら祭に参加（1992年）

元副理事長

松下 みゆき

20年を『まい・夢』と過ごして

何の因果で引き受けてしまったのか…、何から手を付けたらいいのか、舞台制作集団とどう連絡とればいいのか。私自身は、深い後悔の念を幾度も押し込めながら『まい・夢』がスタートしました。

発足当時、組合員の入会者の少なさは、期待していた運営委員会メンバーを大いにがっかりさせました。アンケートでは半数に近い方々が入会したいと答えたのに…と。

不慣れなため失敗を重ねながら、3～4年が過ぎる頃は、いつまで続けられるか、どう閉じたらいいかと本気で考えた苦しい日々でした。会員数が600名に届かない頃の冬、「日本音楽集団」の公演は忘れられない例会です。参加者430名、ガランとした後方席から冷たい風が吹いてくるようで、演奏者の皆さんにも申し訳ない気分で一杯でした。

もっと組合員を呼べる企画を…と一念発起、岸田今日子さんの詩の朗読、夏川りみコンサート等を計画しました。15回例会・夏川りみコンサートで初めて会員数900名を超え、鹿児島市民文化ホール第2が満席。その会場を見渡し、何度も振り返り、「見て！見て！満席だよ！」と、涙を流して喜ぶ運営委員さんたち。その姿を見て一緒に感動し喜びながら、あと何年かは頑張れそうだと思ったりしました。

『まい・夢』は20年も続き、その間会員の増減もあって、喜んだり落胆したりを繰り返しています。会員の「舞台 が楽しみ」「いつもわくわくです」との声に励まされ、委員会の皆と続けています。昨年は、宝山ホールから共催申入れを受けました。このことは、良質な舞台を楽しむという『まい・夢』が社会的に一定の評価を頂いたと受け止めています。

『まい・夢』と共に過ごした20年は、年老いてからも、楽しい思い出になるだろうと思います。その時まで続いて欲しいですね。あ、でも、あともう少し『まい・夢』で遊びたいです。

元副会長理事

三輪 郁代

歴史から学び、平和を子や孫へ

「よりよき生活と平和のために」をスローガンに活動し始めた生協。「平和って何だろう？」「平和でない状態って何だろう？」地震や津波、戦争・紛争…いずれも平和な状態ではありません。なかでも戦争は人間が起こす事、止める事も人間が出来ます。

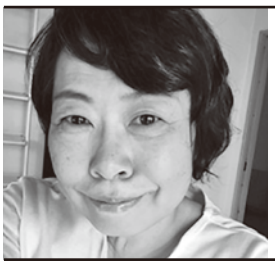
二十世紀は世界中が戦争をしていました。日本も特に“アジア・太平洋戦争”では、加害者となり、終戦間近には多大な被害を受けました。

日本中の都市が米軍の空襲を受け、なかでも1945年6月17日の鹿児島市大空襲では街を焼かれ、沢山の市民が命を落としました。生協ではこの日を「6・17平和のつどい」とし、毎年集会を開催しています。「空襲体験者」の話を聞き、平和を取り巻く講演会や映像等で平和について学び、未来の子や孫に平和を手渡ししていく1日としています。体験談から当時のくらしが見えてきました。物資不足や食糧難にひもじい思いをしました。学校では子供達に軍事訓練をさせたり、工場で働かせ、軍事基地作りに刈り出されました。今から75年前の話です。時が経ち、体験者が人前で話すのが難しくなってきました。

終戦50周年に組合員の戦争体験文集を発行し、県内の小中学校、高校、大学、図書館等に寄贈しました。沢山の方の投稿があり、戦争中のくらしや空襲だけでなく、朝鮮や満州でのくらしや引き揚げの様子等、広く当時の様子を知る事ができました。

また県内には軍事施設がひしめいており、米軍の空襲も激しかったのです。「物言わぬ歴史の証人」と言われる戦跡調査をし、まとめました。

過去（歴史）から学ばなければ記憶は風化し、平和な未来を築けません。設立以来、戦争の学習資料作りを進めて来ました。



元副会長理事

山元 まゆみ

きっかけを作ってくれた、ユニセフスタディツアー

生協活動を長年やってきたうちに、たくさんの経験をさせていただきました。その中でも一番印象に残り、その後の私の人生にも影響を与えてくれたのが、スリランカへのユニセフスタディツアーでした。

2004年12月26日に起きたスマトラ島沖地震は、マグニチュード9.3の巨大地震で強い揺れと津波の発生で、インドネシア、マレーシア、タイ、ミャンマー、インド、スリランカ、モルディブ、ソマリアにまで大きな被害を出しました。

その数か月後に訪れたスリランカは災害の跡さえなければ、名前の通り宝石のような美しい島で、目があえば笑顔で返してくれる純朴な国民性にも魅了されました。

ショックを受けたのは、スリランカで見た地震、特に津波の被害の跡の大きさにはもちろんですが、現地でユニセフの関係者などから聞いた支援の難しさの話です。

帰国後、世界の貧困、戦争、飢餓問題などを自分なりに調べていくうちに、私にも何かできることがないだろうかと、考えるようになりました。児童支援団体に継続的な寄付を始め、学生と共に学べる大学の共修制度を利用して2年間で開発教育講座と国際ボランティア論講座に参加しました。

その講座で、弁護士であり、国際人権NGOヒューマン・ライツ・ウォッチでも活躍されている土井香苗さんの講演を聞く機会がありました。すっかり土井さんのファンになった私は、コープの「6.17　平和のつどい」での講演者候補に土井さんを推薦し、幸運にも引き受けてくださった事も良い思い出です。

生協活動から、さらに広い世界を見る機会を頂いたことに今も感謝しています。

元副会長理事

徳田 初枝

未来の平和のために

13回目の「6・17平和のつどい」(1998年) のテーマは鹿児島市大空襲と新ガイドライン。

昭和20年6月17日に新照院で大空襲に遭われた体験を、鐘撞ヨシエさんに語っていただきました。壕の中の水浸しの死体のこと、人間の焼ける臭い、首、胴、手足がバラバラに散乱し、人々が助けを求める阿鼻叫喚の地獄絵図の中を半狂乱で肉親を探し回った日のことを、淡々と話して下さり、聞かれた皆さんには、戦争の実相が心深く刻まれたことと思います。

鹿児島大学の坂東義雄先生には、「新ガイドラインって何？」というテーマで講演いただきました。世界情勢の変化のなかで、戦争放棄の平和主義の憲法を持つ経済大国の日本が、どうやって人も参戦できるようにするか、アメリカの思惑が新ガイドラインという形になっていること。そして、この新ガイドラインは、戦争のしかたについての指針で、具体的に米軍への食料、燃料、弾薬等の補給、輸送、傷ついた兵隊の治療、慰安、外国艦船の臨検、だ捕、情報の提供等が決められているということです。そして、もっと重要なことは、これに関わる法案（周辺事態措置法案）が、秋の国会で採決の見通しということです。法律で決まれば、あとの祭り。まさに知らないうちに、「まさか……」と思っているうちに戦争ということになりかねない事態にきているのだと実感しました。話を聞き、子供たちを戦争に遭わせることのないよう、母親である私たちの手で回避しなくてはと思いました。

また、鹿児島と第二次世界大戦の関わりを調査している平和グループが奄美と大隅地方の戦跡を写真と資料で展示し紹介しました。

最後に100名を超える参加者の皆さん、一緒に「青い空は」を合唱し、平和の大切さについて考える、よき一日となりました。

（1998年　運営つうしん８月号より抜粋）

元副会長理事

田中 加代子

姶良の産直活動に関わって願う事

創立50周年おめでとうございます。

私も歴史の一部ではありますが、関わる事ができてとても嬉しく思います。

組合員になって以降、色々な活動に参加してきましたが、一番長く深く関わったのが、姶良有機部会の方々です。

「面倒臭いと言っていたら何も進まない」という生産者の声に励まされ、田植え・稲刈り交流会から稲の花見やかかし作り、バケツ苗の育成といった、子供達にお米になる工程を実感してほしい「食育」という観点の親子スクールへと進化していきました。また並行して、地産地消の取り組みとして、姶良地区限定ではありましたが、28年前にハートボックスが始まり、今では野菜ボックスという名前で、全県下に拡がっています。玉ねぎ交流会では生産者と顔を合わせ、野菜が育つ姿を肌で感じられるふれあいの場になっています。

姶良市は、有機ＪＡＳ認定農家が県内最多と言われており、その中には県外からの移住者や、違う職種から就農された方も一定数いらっしゃいます。それでも生産者の高齢化や後継者不足は深刻な問題ですし、気候変動による住環境や食の環境も、予断を許さない状況にさらされています。

有機農業というのは、生物多様性に配慮して生産し、その環境を維持する空間です。こうして作られた作物の価値の知らせ方、産地・産直をしっかり守るという事を生協として更に発展させ、未来につなげていって頂きたいと願っています。

元副会長理事

田中 小夜子

子育てひろばと共に

組合員活動も25年が経ち、食・暮らし・平和の取り組み等を体験しました。その中で子育て支援に関心を持ったのは、当時、私自身が子供の育ちや教育面で悩んでおり、相談できる所を探していたからでした。その頃、子育て教育支援活動検討委員会が始まり、解決の糸口を見つけたいと参加しました。委員会で検討を重ね、組合員へ子育て教育アンケートを実施して、カナダの子育てや福岡の育児ボランティア「ひだまりの会」に学び、ノンプログラムの子育てひろばが誕生しました。合言葉は「つながりあって楽しい子育て」です。2002年9月25日、紫原店集会室をスタートに、開催時間内なら予約なし、いつ来ても帰ってもOK、ふらっと気軽に立ち寄れる屋根のある室内版の公園として子育てひろばは全県下に拡がっていき現在に至ります。紫原店ちびっこ元気くらぶは、9月下旬で満19年に。始めた頃は対応に戸惑い不安に思う事も多々ありました。全県のスタッフ交流会や講演会等で、ひろば開催の為に楽しく快適にする工夫や方法を学び、実際に活用しました。

参加者は4〜5年来て下さった方々もおられ、子供達の成長を私達スタッフも見守ることができ、嬉しく、大きな励みになりました。子供達は成長と共に次のステップへ進んで行かれます。短い長いに関係なく一緒にひろばを通してつながり、ホッとできる時を共有出来てよかったです。

私の課題の教育面の悩みは、山あり谷ありでしたが、スタッフに支えてもらい、これが正解とは言えないまでも今ある私や家族に出会えた事は確かです。子育てひろばを全県で作りたいと思った18年前、多くの理解ある組合員の力で19会場に拡がったこと、感謝の気持ちでいっぱいです。コロナ禍の終息を1日でも早くと願っています。またひろばで参加者・スタッフと会いたいと思います。

元副会長理事

米倉 圭子

生協の活動に携わり思うこと

夫が転勤族だったため、私の生協歴は鹿屋から始まり、知覧・鹿児島市と3ケ所にわたります。それぞれの土地でたくさんの組合員さんと知り合い、一緒に活動して楽しかった事などたくさんありました。

組合員活動を始めて現在32年目ですが、助け合いの会や子育てひろばなどに今は参加しています。最近は高齢者になり体調も芳しくなく、元気に使命感に燃え毎日活動していた頃が懐かしく思い出されます。32年間の中で約19年間、くらしの助け合いの会に携わっています。助け合いの会は、生協の組合員による福祉活動として35年以上続いています。時代に合わせて活動の仕組みは少しずつ変わってきましたが、今では全県に拡がりました。暑い中でも寒い中でもコーディネーターと活動会員で、助けを求める援助希望会員の元へ駆けつけています。この助け合いの会が少しずつ世間にも知られ、脈々と続いているのは、この会を立ち上げ努力してこられた先輩幹事さん達のおかげと感謝しております。特に道半ばで急死された廣瀬さんのことは忘れることができません。

さて私は、以前の運営委員長、ブロック委員長、また地方担当理事、副会長理事と活動してきました。理事になってからは、ワイワイ楽しくやってきた時代とは違って、コープかごしまの代表の一人として、外部の会などにも出席しなければならず、言動にも責任を持ってと、私にとっては難しく思われることが多々ありました。今となっては、しっかりやれなかったなあと反省しています。

コープかごしまも、創立50周年を迎えます。歴代のたくさんの理事さんや職員の努力と頑張りに支えられてきた50年でもあると思います。現役の理事さん達にも、無理せず頑張って下さるようエールを送りたいと思います。あと何年か分かりませんが、私も無理せずゆっくり活動して行きたいと思っています。

前副会長理事

上釜 智温子

鹿児島市エリア40周年イベントを振り返って（アミュ広場にて）

10年前、40周年イベントを振り返ると、1年以上前から話し合いを繰り返し、知恵を絞ったことが思い出されます。40周年企画はエリアごとの開催で、まず鹿児島市内の実行委員メンバーで考えたのはどこでやるのかということです。

たくさんの人にコープのことを知らせることができる場所はどこ？テレビCMや新聞チラシ、ウェブなど知らせる手段がたくさんある現在と違い、当時は生協？コープって何？と言われることもしばしば。時間を費やして話し合って決まったのがアミュ広場でした。

さて、イベント当日は2011年10月22日土曜日でした。

職員、組合員が準備のため、早朝6時から集合したところに突然の大雨と雷。開催が危ぶまれるほどの荒天でしたが、奇跡的に雨が止み、10時開会へと漕ぎつけました。

舞台では組合員活動のお知らせ、環境クイズ、踊りなど日頃の頑張りの発表。そして最後には、事前に募集したコープに関する川柳の中から受賞作品を発表しました。やっぱり生協で賞を受賞した「牛乳と　卵はぜったい　ゆずれない」などの力作が数多く寄せられました。

パネル展示はコープの歴史に平和・環境などの大切にしていることを、人々の目に留まるべく貼り出しました。

数多くのテントをつなげた産直商品を中心とした試食コーナーは賑やかで、生産者さん、メーカーさんの快い協力のもと実現しました。生産者さんの横で組合員が手伝いをする息の合った姿もコープならではの光景に感動しました。

40周年のイベントは駅を行きかう学生さんや勤め人等、普段コープとは縁のない人たちにも生協の存在をアピールできたと自負しております。生協は職員と組合員、生産者が一体となって、盛り上げられる。みんなに愛されるコープだと実感しました。コープ大好き。

副会長理事

堤　明美

みんなで創る―これが生協

２年に１度の「つくるものいかすもの交流会」は、メーカーと組合員が一堂に会す大イベント。毎回、早々に定員に達する盛況ぶりです。2016年度は実行委員として企画段階から関わり、開催までにどれだけの苦労があるのかを垣間見ることができました。

それは「スクロールファッションショー」。実は言い出しっぺは私です。大好きなスクロールが、案外かごしまでは利用されていないと知り、「組合員有志が私物のスクロール商品でファッションショーっぽくしたら？」程度のつもりが、スクロールさんも大乗り気、どんどん本格化していきました。城西店の店舗委員さん方がモデルを受けてくれ、来鹿したスクロールさんと直接打ち合わせ、最新秋冬カタログから服を選び、サイズやイメージが合うまで何度も交換。ナレーションやBGMの選定、当日のモデル控え室の準備等々。初めてで全て手さぐり、担当職員の苦労（苦悩）は私の予想を遥に超えるもので、申しわけなさが募るほど、やる気も湧きました。

また同時に、若い組合員に来てもらおうと子育てひろばに職員が出向くなど、新しい試みがあちこちで行われました。

当日は大好評！初めての方・若い方の参加も多く、交流会に新しい風を吹き込めたのではないかと自負しています。その夜は達成感と充実感でいっぱいでした。

華やかな舞台、にぎわう人々、笑顔にあふれた交流会ですが、そこに至るまでに組合員と職員が知恵を絞って話し合い、各々の持ち場で最善を尽くすことで実現します。組合員が「お客様」ではなく、「共通の目的を追求するために集まった仲間＝協働者」として関わることができる組織。生協は、やっぱりそこらの企業とは違う、これが生協だ！と感動します。これからも、組合員とメーカーと職員とそこに集うみんなの笑顔があふれる交流会として発展・継続していきますように・・・。

副会長理事

南部 由理子

生協コープかごしまと離島特販のつながり

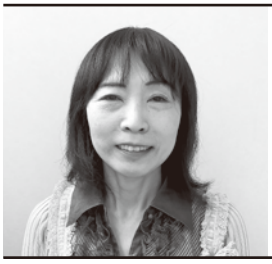
創立50周年を迎えられました事を心からお祝い申し上げます。

1985年より離島への配達が始まりました。生協コープかごしまが50周年を迎える年、離島特販は36年目となります。理事会に携わる事で当時離島で奮闘されていた方からお話しを聞く機会があり、その中で様々なご苦労と思いきや最後には「楽しかったわ」とのお声を多くの方からお聞きします。離島での生協のある暮らしを築きあげられた事に感謝しています。「頑張ってね」と温かいお言葉を頂き、少子高齢化や過疎地域が進む中で今後地域でのかかわりやあり方などを模索しながら活動出来ればと思っております。

対外的活動では今後の交流や活動につながる様、自己紹介の時に奄美大島からの参加とコープかごしまが鹿児島県の全有人離島に配達をしている事、特にお店の無い島ではライフラインになっている事などをお伝えしています。「かごしまの離島」と「生協コープかごしまの離島での役割」を様々な所で理解して頂く事が少しできた様に思います。

又、離島特販基金に於いては、事業がスタートした時点から海上輸送費の負担が組合員にあります。2013年10月配達送料の改正があり運賃とは別に新たに配達基本料が付加される事となり組合員の負担は多くなりました。同時に離島特販基金が設置され、複数の組合員さんから離島の組合員さんに運賃負担を軽減する為にとみんなでたすけあったらどうでしょうと声を頂き実現し、毎年還元されています。皆さんのお気持ちとご協力に感謝申し上げます。

最後に50周年を迎えられた慶びと新たな気持ちで生協コープかごしまの理念を大切に関わっていきたいと思っております。



副会長理事

笛田 尚子

次の世代へ引き継がれているユニセフお年玉募金

生協の組合員になってから30年近くになります。当時は南谷山店の近くに住んでいたので毎日のように買物に行っていました。お店がリニューアルの為に1週間ほど閉店した時のことです。小学生だった長女の担任からお聞きした話ですが…半数近くの生徒が南谷山店の話題を日記に書いていたそうです。子どもたちが、お店が新しくなることを楽しみにしていることが伝わってきて、地域に愛されているお店だなと実感した事を思い出しています。

さて、生協活動を振り返る中で娘たちと一緒に取り組んだ活動のひとつにユニセフお年玉募金があります。ユニセフお年玉募金とは1979年の国際児童年に「バケツ一杯の水を送ろう」とユニセフ募金に取り組んだことをきっかけに毎年、生協コープかごしまが取り組んでいる募金活動のことです。

我が家も子どもたちのお年玉の中から募金したり、娘たちが小学生時代には年明けにお店で生協職員、ユニセフの方々と共に募金活動に参加しました。次女はユニセフ協会での贈呈式にも出席させていただいたこともあり、とても貴重な経験となりました。

みなさんからの募金総額は2020年には1億円を超え、ユニセフを通して貧困に苦しむ世界の子どもたちへ経口補水塩や薬、ワクチン、勉強キットなどを寄贈することができました。

自分のお年玉から募金していた子どもたちが今では親になり、自分の子どもたちと一緒に募金しているという話を良く耳にします。ユニセフお年玉募金がしっかりと次の世代へと引き継がれていて、とても素晴らしいことだと思います。「ひとりがみんなのために、みんながひとりのために」という生協コープかごしまのスローガンが頭に浮かび嬉しくなります。きっと私の子どもたちにも引き継がれていくことでしょう。

特定監事
（鹿児島国際大学
経済学部教授）
山本 晃正

コープかごしまの平和活動 私の原体験

50年以上前に父から聞いた話です。海軍兵として太平洋のウェーク島（当時の表記はウェーキ島）に派遣された父は、軍艦から上陸艇で上陸の際、島の配備米軍から機銃掃射を受けました。さっきまで同じ釜の飯を食っていた戦友たちが、次々に海面に浮かぶ姿を見つつ進みます。上陸後に負傷した米兵に遭遇しました。怪我で動けず、片手で拝む様子を見せて助けを請うその米兵の横面を、父は銃の台尻で殴り飛ばしました。「あの時は頭や胸を撃ち抜かれて浮かぶ戦友たちを見て、気が狂ってたんだろうなあ」と述懐していたのを覚えています。また、捕虜にした米兵は、文字通り素っ裸にして針金で後ろ手に縛り、連行しました。

島を占領した後は物資が欠乏し、日本兵以上に捕虜の食料は乏しく、腹を減らした捕虜が倉庫から缶詰を盗みました。この捕虜は、衆人の面前で文字通り斬首されたとのことです。

捕虜の面倒をみていた父は、捕虜との間に一定の交流が生まれたようで、米軍の残したトラクターの運転方法を教えてやると言われました。「日本は戦争に負けるから、覚えておけば役に立つ」というわけです。英語を話せない父でしたが、「あいつら（米兵のこと）、ミルクのことをミョッコミョッコって言うんだ」と言っていましたから、意思疎通していたのでしょう。終戦前に本土帰還となった父に、ある捕虜が自分で木をくりぬいて作った鎖を贈ってくれたそうです。

寿司屋を営み、私には叱られた記憶がないほどに温厚で心優しかった父が、ビールを飲んでこの話をしながら、「人間はみんな同じだ」「戦争はいかん」としみじみ語っていたことが、戦争を知らない私の原体験です。

コープかごしまでも、戦争に抗い平和を求める活動が連綿と続けられることを祈ってやみません。

元常務理事
梶原 昭二

生協人生を振り返って

私の生協人生は、鹿大生協9年、北九州市民生協5年、鹿児島市民生協・県民生協・コープかごしまが18年で32年間であった。

コープかごしまの最後の10年程を除くと、家庭の主婦を中心とした地域生協づくりが躍動的に進められた創立期や建設期の時代であった。

鹿大生協時代の後半には鹿児島市民生協の設立に取り組み、引き続き福岡の北九州市民生協を皮切りに福岡市民、むなかた市民、久留米市民、筑豊市民と5年間に5つもの生協づくりへ参加した。（この5生協が合併したのが後のエフコープ生協）

高度経済成長期の落とし子ともいうべきウソツキ商品、添加物まみれの食品や食品公害の氾濫の中で、これに対抗し自ら欲する商品を自らの手で作り、手に入れる組織を作ろうとする主婦達が中心的な担い手であったが、私達専従者も若い情熱と体力をもって参加した。肉体的には確かに厳しく、北九州には38才の時単身赴任し、ほぼ半年間は毎日午前4時起床で牛乳配達、昼は商品配達、夜は注文書作りや翌日配達の品揃え・積み込みで寝るのは夜中という日々だった。しかし、気分は全く溌剌としていた。新組織と事業を創り上げるという決して夢ではない具体的な目標があった。頑張りが組合員増や供給増に実績として具現化され、次への原動力となった。その点では、現在の複雑・多岐・高度な組立てや対応を要求される時代と比べると単純で恵まれた時代であったと思う。

さて、現在の地域生協は、組織や事業が拡大し、社会的な地位も高まり、それに応じた責任も大きくなっている。そういう中でやはり重要なことは、前提としての「生協のめざすもの」や「理念」を、いかに生協に関わる一人一人のものにするかであろう。今後とも、そういうパッションを持てるような生協運動の展望づくりや人づくりが欲しい。

元常勤理事
村田 啓一

いくつもの生協経験と生協コープかごしま

私は鹿児島大学生協で働き始め6生協を経てコープさが生協で終わりました。今は佐世保でララコープ組合員です。生協を選んだのは、鹿大生協の学生理事をして先輩の石田さんや坂元さんの夢を聞き、鹿児島市民生協設立を見て、紫原店オープンを手伝い、市民生協の可能性にひかれたからでした。

大学生協は経理からで、その後市民生協監事もしましたが、1期もせずに大学生協連の要請で佐賀大学生協支援に4年間移籍。要請を受けたのは生協の理念に協同組合間連帯があり、鹿児島市民生協も九州各地の生協へ積極的に人材支援を行っていたからでした。

佐賀での4年は、佐大生協専務として経営確立と学生組織部の強化、他大学の介入から組織を守ることでした。2年目からは、佐賀市民生協の赤字打開・立て直しのため市民生協専務理事に就任。組合員が約3倍になり黒字化でき、4年後に鹿児島市民生協に移籍しました。

市民生協から県民生協、コープかごしまに変わる中で人事担当、商品部長、総務部長、組織部長と部署を代わり、常勤理事も務めました。その後、農水省の公的補助を受けた産直センター建設に携わり2億4千万円を得ました。

99年に、佐賀市民生協で商品や事業経営への信頼喪失につながる大きな問題が起きました。要請もあり、自分も役に立てばという思いもあり再び佐賀へ。佐賀の前にコープ九州に在籍し、2003年にコープさがへ移籍。九州の再建委員会責任者は石田さんから坂元さんになり、毎月直接指導。その後3店舗をすべて閉め、3年で借入返済・黒字化し、コープさがの理事長を辞しました。

私の経歴は、鹿児島の生協に生協間連帯への積極的方針があり、九州の生協連帯を担ってきたことが基盤に在りました。佐賀時代も鹿児島の同僚役員や職員から多くの支援を影ながら頂き、感謝と共に今後も大切にして欲しいと願います。

元・常勤理事、
元㈱コープサービス
専務理事
大地　智

8・6水害

2020年の年頭にどれだけの人が今を予想できただろうか。

新型コロナウイルス、感染に恐怖を持ち外出時にマスクをし、手洗い励行している、特に我々世代では。

人生で経験する初めての出来事。

これと同じように、1993年8月6日の夕方まであの夜加治屋町の電車通りを冷蔵庫がぶかぶか浮かびながら流れて行くのを想像できただろうか。

当時旅行事業部、共済部と㈱コープサービスは加治屋町の平和生命ビルに事務所を構えていた。

この年は春から雨の多い日が続いた。この日も一日雨が降り続いていた。

夕方（株）コープサービスは5階に事務所があったが、そこから外を見ると歩道と車道の間に水が溜まりつつあったので1階のコープガイドに降りて見るとじわりじわりと水嵩が増しておりついに外よりも1m近く高くなっている1階フロアにも水が入ってきだした、パンフレットを土嚢がわりにして入水してくるところに積み上げた、なんとか踝位までで入水は止まったので椅子に腰掛けていることができた。

私を更に驚かせたのは12時前後に水の引いた電車通りを照明のない中電車はもちろんのこと車一台として通らない中を黙々と歩いて帰宅する男女のすごい群れであった。

そして、僕も加治屋町から吉野の通行止めを泥の中で靴を取られながらも越えて歩いて帰宅した。

人生で初めて、そして二度と経験したくない㈱コープサービスでの思い出だった。

元常勤理事

高吉　学

コープ九州から見えた
コープかごしまの店舗

コープ九州事業連合に出向し、コープかごしまの店舗事業を外から概観できる機会がありました。最初は94年からの店舗構想委員会事務局、二度目は04年から店舗開発室の任務でした。

ながらくコープかごしま店舗事業の一端に関わらせていただきましたが、店舗事業単独で（共同購入のお世話にならず）事業収支を合わせられるよう当時は必死でした。

そのためには生協の店舗が組合員さんだけでなく地域になくてはならない存在になる内容づくり、それら含む競合企業などとの適正な戦略を・・・。

コープ九州に出向して、共同購入事業の収支が順調の場合、店舗事業は事業収支が黒字でなくても良いのだということを理解したのは新鮮な驚きでした。（ただ誰もそんなことは言っていません、個人的な理解）

また鹿児島は小売業の企業数が少なく生協店舗のポジショニング（戦略的な位置取り）が比較的取りやすいことも理解しました。

九州内でも各種小売業がそれぞれの戦略で鎬を削っており、店舗として存在し続けるためには、店舗の基本運営を含む戦略的な舵取が未来永劫つづきます。

40年前にあった小売企業チェーンの幾つか無くなっている中、確固として生協コープかごしまの店舗が存在していることが、もう10年余、志布志店と鹿屋店の一利用者の身になった今、なぜかうれしく思えるのです。

元常務理事

平田　優

「組合員」に大いなる期待を込めて

50周年おめでとうございます。

実は、私のコープかごしま歴は分かりやすく、当時の県民生協へ入協（四国の生協から移籍）して最初の担当させていただいた業務が「15周年組合員企画」でした。

それからかなりの年数を組合員活動、組合員組織との関りで過ごさせていただきました。本当に幸運だったと思います。

1980年レイドロウ博士が新自由主義・グローバリズムの中で爆発的に巨大化する資本主義経済の中で「協同組合の思想的危機」を提起し、協同組合は何者なのか?アイデンティティは（存在意義は何か?）という議論が世界の協同組合で行われました。95年にＩＣＡ宣言（定義・価値・原則）としてまとめられます。この問い直しと創造の議論について、コープかごしまの当時の構成員は、本当に誠実に（多分、日生協以上に、日本では数少なく）向き合ったのではないかと思います。

協同組合原則は7つの原則のうち5つまでが組合員との関係性を述べています。

いかに誠実に、この原則を具体化するのかが組合員（組織）政策と言われるものではなかったかと思います。日々変化する組織の状況や世の中の様子の中で最善の方法を模索し続けるものだと思います。

持続可能性というテーマの中で、新型コロナという世界的な厄災を経て、新自由主義の克服の光がやっと見えてきました。

生協コープかごしまの発展を祈念するものです。

元常務理事

神谷　進

地球～共有の財産～について思うこと

地球上に人類が誕生して以来、人間は自然に働きかけることによって人間にとって都合の良い環境をつくってきました。その中で他の生物を絶滅させたり、地球への過剰な「使用」による問題もおこしてきました。人間が自然に働きかけ、生産や創造をすることは基本としては発展の過程でありこれを否定するものではありません。しかし、地球や他の生物との調和のある共生を本気で考えて、実行していくことの重要性が今、問われています。自らの利益追求のみを目的とした国家や民族や企業の活動を放置しておけば人類全体、地球全体にとっての危機的状況をもたらしかねません。特に資本の論理のみで私的企業が人類共通、生命全体の共有財産である地球を勝手に痛めつけることは厳重に監視する必要があります。

協同組合は、人と人とのつながりの組織です。日々のくらしをより良くしたいという願いを寄せあった生活者の集まりです。ここでの一人ひとりの自覚的な環境にやさしいくらしづくりの実践が大きな力になっていくのだと思います。

「ごみを減らす」取組みからもいろんなことが見えてきます。地域の生活環境や行政の施策の実態や姿勢もわかってきます。また自分自身のくらしの見直しにも役立ちます。小さなことのようですが地球的規模での環境の問題に思いを寄せる大きな一歩だと思います。

現在の地球の状況は宇宙全体でも、膨大な時間の流れの中でも、極めて特殊で瞬間的な「すばらしい」環境です。そして、それを急速に壊し始めている時でもあります。地球・生物・ヒトの持続的共生は果たして可能なのか？選択が迫られています。極めて未完成の協同組合人としてより良いくらしを求める人類の英知と協同を信じて、小さな一歩からでも始めたいと思います。

（1991年　「YOU・友」10月号より抜粋）

元常務理事

飯塚 幸二

生協とシステム改革
情報システムの発展に乗って

生協の事業への情報システムの活用は、70年代の組合員・出資金の管理から始まる。

後半には、共同購入事業改革の一環として活用が始まった。共同購入の仕組自体が新参ものであったことが、情報システム活用を進めた。注文をすばやく集計し確実に商品を届けるため、受注・納品・物流のシステム化が事業の成長と合わせて進んでいった。初期のシステム導入段階では、前例がなく、ほとんどが新規開発となり、手探りで共同購入注文書入力集計を始めた。80年代、県民生協への発展期には当時物珍しかったオンライン端末を支所に設置。その後、OCR装置を注文の集計に応用したことが班長さんの注文集計負担を解放し急速な事業拡大へとつながった。物流では、全国の生協と共同でPD集品方式を開発。離島事業には注文端末の導入など、事業の発展を新システムの開発が支えた。情報システムは他生協との連帯の要にもなったが、改革を急ぐあまりの誤りもあり、多大な迷惑・損失を発生させたことも。

店舗事業にも情報システムを進んで活用、九州初のポスは二号店（谷山店）の開店時から。本格的スキャニングポスシステムは6号店からだが、これはヨーロッパの生協と共同での開発を進めた初号機だった。その後、90年代の多店舗化は発注システム、加工センター管理、請求仕入管理などのシステム開発が支えていった。

創立以来、これまで事業とシステムは補完しながら並行発展してきた時代と言えるかもしれない。さて、これからはどうだろう。情報システム・ネットワークの急速な発展に少し取り残されている感もあるが。

元常務理事

中間 良之

日本生協連にいて感じた コープかごしま

6年前に日本生協連に移籍し、コープかごしまと外からおつきあいをする機会を得ました。その前のコープ九州に在籍していた7年間を加えるとその期間はかれこれ13年になります。もちろんどちらも生協ですので、基本的な価値観に違いはありませんでしたが、地理的な制約に起因するコープかごしまの事業上の困難さに思いいたることはたびたびありました。首都圏や関西や九州北部をはじめとする人口集積地で展開する生協と、平野が少なく半島や離島での事業を余儀なくされる鹿児島とでは、事業効率に大きな差があるだけではなく、情報量でもハンディキャップがあると思います。研修や視察ひとつを取ってもそれなりにコストがかかるわけです。

そういう中でも、離島にも翼を広げ、全ての市町村に組合員を擁し、早くから店舗と無店舗の両輪で事業を展開して県内の消費者にあまねく貢献しようとする意欲的な事業戦略や、産直や地域諸団体との連帯活動を通じて地域の中に共同の事業と協同の理念を広げようと努力されている高い志、そして政治や平和や文化に関わる臆することのない発信を通じた消費者組織としての断固たる決意など、全国の生協の中でも異彩を放つような特徴を持っていることには常々注目していました。

旧制七高の寮歌に歌われた北辰のように、協同組合原則を大切にし、それをいつも斜めに見上げながら事業運営と組織運営をすすめてこられた到達点がここにあると思います。

そのスタンスを維持しながら、事業にも、生協であることにもますます磨きをかけて、鹿児島で不動の位置をしめるための次の50年になることを期待したいと思います。

元常勤理事

小野 貴之

共済の原点を忘れずに

1987年9月入協した途端、いきなり2か月後には当生協初めての≪たすけあい≫共済募集の責任者。加入申込書は、班に1枚の連記方式。班全員の住所氏名を印字し、健康告知回答と生年月日は鉛筆で記入するOCR用紙。月掛金300円で入院日額500円などの保障内容。目標5千名に対して830名の加入者。これが、手探りで始めた第1回キャンペーンでした。

元受共済の県知事認可を受けたのは1991年。奇しくも私の誕生日の12月19日でした。全国の生協では8番目の認可で、当生協20周年記念事業として新たなスタートとなりました。（現在は、受託共済事業となっています。）

1993年鹿児島の夏は、8.6水害など豪雨災害に見舞われました。現コープ共済連からの支援を得て、8.6水害エリア加入者の全戸訪問を決断しました。当時共済部職員の田嶋健一氏、野元英俊氏と徹夜で、加入者住所を地図に落とし込みました。そして、レンタル自転車での「お見舞い訪問活動」を実施しました。製本にした「'93年鹿児島の夏_豪雨そして台風」と題し、給付を受けられた加入者アンケートや日生協会報に掲載された“濁流と泥土の中に絆が見えた”の記事は、今でも私のバイブルで、私の退職記念にこの復刻版を職員の方々に送呈させていただいたほどです。

時代とともに、共済も少しずつ変わってきましたが、共済における普遍的な価値は「相互扶助」です。共済の原点である「困ったときはお互い様」の相互扶助。まさに、「協同」と「助け合い」の組織、生協に求められている事業です。1862名から32万名を超えた生協の組合員。830名から13万名を超えた共済の輪。生協だから加入の輪が広がり、生協だからより良い共済を作れる。これからも、そんな情景が続くことを、そして、“百人の一歩で”取り組んでいくことを望んでいます。

元常勤理事、
鹿児島県生協連専務理事
東垂水 末義

地方での生協づくり

入協2年目の1983年春、姶良町の担当になり、組合員拡大で常にトップレベルだった先輩の今村哲博さんから引き継いだ。引継ぎで「1週間に600人の組合員に商品を届けている。もし姶良町議選に出たら組合員とご主人の分、1200票をとって当選するくらい組合員に声をかけ、声を聴け」と教えられた。また当時、姶良には当生協との合併話を合理的な理由もなく潰した生協があった。その生協の熱心な組合員に遭遇した際に商品説明で論破されたことが悔しくて、勉強して翌週リベンジに再訪問、その後1ケ月以上訪問しお互いの商品のこと等の思いをぶつけ合ったこと等、今でも忘れられない。

当時、共同購入担当が追いかける数値に組合員拡大があった。異動時期の春の月間では「近くに引っ越してきた人がいるよ」と組合員から情報が入るとチラシや商品サンプルを預けて声かけをお願いし、秋の月間は「目標まであと何人ね」「あそこに声かけてみるが」と組合員の協力で達成していた。

その後、85年に加世田、86年にみぞべのセンター長として赴任。加世田センターでは指宿市での「ダ・カーポ」コンサートの満席に向けて声をかけ続ける組合員に組織拡大の楽しさや組合員の力の凄さ、みぞべセンターではブロック委員会、商品・家計・生活文化委員会等の運営を通じて組合員参加や事務局のあり方等を学んだ。

今思うと遅くまでの仕事で大変な面も多かったが、一番組合員に寄り添い、組合員もそれに呼応し組織が拡大していくのを実感でき充実していた時だったかもしれない。

家計調査グループ、
元理事、元監事
田平 睦子

私と生協の50年—家計活動を中心に

夫が鹿児島に職を得て一家三人で大阪から引っ越してきたのが1971年。丁度生協が発足した年です。4年後にやっと私たちの地域での配達が始まり加入しました。K地区の初代運営委員長を任され、3年間担当しました。地区の家計委員の方が「誰か付ける人はいませんか」と言われて手をあげたのが生協の家計簿との出会いでした。

家計簿をつけようと思ったのは、自分がどんなお金の使い方をしているか知りたいという事と、生協で組合員の家計簿を集計するという事にも魅力を感じました。物価の上がり方がひどいのに発表される物価指数が低くて自分の生活実感とが合わなかったので、家計簿集計で納得のいく数字が出るのではないかと思ったのです。その時からほとんど欠かさずに家計簿集計結果を提出してきました。

初めの頃の家計委員会は生活に役立つ講習会をよく開いておられました。「手作りおやつ」「大学進学の費用」などなど。特に学費の学習は真剣に貯金に取り組むきっかけになりました。「昇給分は全部貯めよう」と決心した事が懐かしく思い出されます。

その後本部家計委員会に誘われ入会しましたが、会話のテンポについてゆけず、頭の上を数字が飛び交っているという状態でえらいところに入ってしまったと思ったものです。

最近の集計結果では、収入の少ない世帯の方が消費税の負担率が高いこと、50歳代の夫の給料がここ30年減り続けて40歳代と変わらなくなっていること、妻の就労が増えていることなどが分かっています。

委員会からグループへと生協での位置づけは低くされましたが家計簿活動の大切さはますます増しています。集計登録者が増え、集計の信頼性が増すようになりたいものです。本部がもっと活動に力を入れてほしいと願っています。

元常務理事
堀　良子

人に大切な生協組織

私と生協の出会いは、私が住んでいた団地に生協連の店が出来たことにはじまりますがそのお店は数年後にはつぶれてしまいました。それから何年か経ち、くらしを守る消費者の会による市民生協づくりが始まりましたので団地住民に生協加入を働きかけました。1971年4月1日の鹿児島市民生協設立総会に参加しましたが、1000名もの仲間が一堂に会し市民生協がスタートした感動は今も忘れる事が出来ません。

地区に運営委員会が出来ると自主的に生協を知らせ広める活動に取り組みました。毎月1日が拡大統一行動日として運営委員会では仲間づくりの地域訪問をしました。歩きながらまず洗濯物を見て子供用の衣類があれば対象者、近所に何軒かあれば班が出来ると皮算用しながら戸別に訪問したものです。

私は、創立3年目位からしばらく「新班説明」の仕事に携わりました。生協加入の希望があったお宅に「必ず5人以上集まっている」ことを確認してから、約束の日に、コープ商品や生協説明の資料を抱えて出かけました。説明会では、生協を利用するために生協の仕組みや共同購入の利用の仕方、商品の特徴、班の運営の約束事など説明し、一部の人に負担がかからないよう班長さん、当番さんを決めていただきました。

当時の商品環境と言えば、添加物野放し状態で巷にあふれていた時期でしたが、中には、「添加物があるからいいんじゃない」という人もいましたが「成長期の子供たちに安心して食べさせられる商品を」と話すと大方のお母さん達は頷いてくださいました。

かつて、子供のためにと班づくりや新班説明会に駆け回っていた私も既に後期高齢者となり、買い物もままならず、共同購入に頼って生きています。共同購入や個配は、まさに高齢者にとって命綱ともいえる存在だと実感しているこの頃です。

生協コープかごしまLPA、
元理事、元監事
川野 悦子

組合員LPAとして活動してきて、今思うこと

ＬＰＡって何？と思われる組合員さんも多いと思います。

ＬＰＡとはライフプランアドバイザーの略称で、言うなれば生協版ファイナンシャルプランナーと言ったところでしょうか。私たちの主な活動は、毎月の定例会と組合員さんからの依頼の学習会対応です。フレンズやグループとは少し違った活動をしています。

ＬＰＡは2005年に一期生が共済連主催のＬＰＡ養成講座を受講して始まりました。本年度、新たに4期生2名を加え13名で活動しています。発足当初は 何をしていいのかも分からず、約一年間は生協共済部やコープサービスの職員の方にお願いして保険や社会保障の勉強をしました。学習会対応を始めたのは翌年からでした。

初めての学習会では足が震え、冷や汗を流しながら対応した事を覚えています。これまで学習会をしてきて嬉しかった瞬間は、やはり参加された方から「よく理解できた」や「もっと早く話を聞きたかった」などの感想をもらえたときです。

また大変な点は、学習会の内容が毎年の制度改正により変わっていくため、常に勉強していかなければならないところです。ＬＰＡとして充実した活動を続けていますが、まだまだＬＰＡの認知度は低く学習会の依頼が少ない事は少し残念な点です。

私たちが最初に勉強したときに感じた「あと10年早く知っておきたかった」、この思いを少しでも多くの組合員さんに感じて欲しいと願っています。
これからも私たちは「知らなきゃ損！」を合言葉に消費者（組合員）の立場に立ったファイナンシャルプランナーとして活動を続けていきたいと思います。

前・環境グループ代表
永田 まり子

これからの50年

創立50周年おめでとうございます。組合員32万人の一人として一緒にお祝いできることは本当に嬉しく思います。

私の生協との関りは中学1年の時に、福岡で、母が安くて良い牛乳・卵を食べさせたいとご近所の方々と班を作ったのが始まりです。鹿屋でかごしま県民生協に入り名瀬、鹿児島市内と住居は変わりましたが、COOPはいつも一緒でした。3人の子供も生協で育ち今では孫たちにもなくてはならないものです。

1997年頃、環境問題が新聞等で取り上げられていました。生協の勉強会で食の安心安全だけでなく生活環境も大切だと、二酸化炭素の排出量・酸性雨の測定・河川水質調査、そしてダイオキシン発生問題はゴミを出す私達にも責任があることなどを学びました。ゴミの分別をしっかりしなければとの思いから、分かり易い分別の仕方、ゴミを出さない工夫などの学習の成果を組合員さんにお知らせしようと『エコクッキング』を始めたのが20数年前のことです。

ゴミを減らすために家庭で堆肥を作ったり、93年にはレジ袋無料配布を呼びかけました。スムーズには運びませんでしたが、不要の雨傘・着物のリメイクで買い物袋の作り方をお知らせしたり「風呂敷は素敵なエコバック」と小池都知事が推奨される前から組合員さんに呼びかけました。

買い物袋持ち寄り運動と平行してゴミを少なくするためのエコクッキング、堆肥作り、牛乳パックでハガキ作り。太陽光で卵料理など組合員さんだけでなく、鹿児島環境フェスタでも広めることができ2017年6月鹿児島県環境保全活動優秀団体表彰を受けグループはもちろん組合員みなさんの励みになったと思います。

これからも自然環境、社会環境はさらに厳しくなるようですが、住み良い世界を次の世代に渡すためにも様々な課題を一歩一歩クリアしていきたいと思います。

元ハム・ソーセージ
開発委員会委員
高山 たえ子

CO・OPウインナー
誕生を祝して今思うこと

生協コープかごしま創立50周年おめでとうございます。

二歳の孫娘が「ウインナー、ウインナー、おいしい、おいしい」と、笑顔でプリプリ食べている姿に、40年前、生協十周年記念「安心・安全でおいしいハム・ソーセージ開発」に関わり、当時3歳だった次女を連れて、緑豊かな環境の工場に見学に行った時のことが昨日のことのように鮮明に思い出されます。何よりも感動的なことは40年経った今でも食べ続けられ、作り続けられていることです。消費者と製造者の信頼関係があってこそだと思います。

当時、食品の添加物が問題になっており、子どもたちの大好物なウインナーは添加物の塊でした。子育て真っ最中の母親たちは安心して食べられるものを、子どもを守りたいとの思いからハム・ソーセージの歴史・材料・添加物の学習・工場見学をしました。

最も衝撃を受けたのは、生協のウインナーは県内産豚肉で1キロから800グラム、輸入肉中心の市販品は添加物を含むことから1.2キロできることでした。会は充実し学びと和気あいあいの白熱した中で、素人であるがゆえの率直な意見・感想等を担当者にお願いしました。担当者は皆の言葉に耳を傾け、次回に試作品を持参、検討し、持ち帰り、何度も試作を積み重ねて無添加で作る難問題を一つずつクリアして遂に待望のウインナーが完成しました。40年経って思うことは、萬田芙美委員長の元に皆で作り上げた「安心・安全でおいしいCO・OPウインナー」が全国の生協、全国の食卓に上がり、より多くの人々に食べてもらうことです。

元職員

濵田 孝一

市民生協の私なりの思い出

①生協に入る前の私／生協に入る前は旧日本国有鉄道大阪鉄道管理局管内京都車掌区にいました。その前に国鉄と県庁の職員採用試験に両方共合格しました。そこで私は「タダ」で汽車に乗れて全国を旅したいなと思い国鉄を選びました。そして勤務は京都～西鹿児島間を車掌として行ったり来たりでしたが体調をくずし帰鹿。その時知り合いから鹿児島大学の生活協同組合が人を募集していることを聞き早速応募しました。人手が足りないこともあったのか即採用です。

②鹿大生協への入協一年生／鹿大生協では購買部の仕入部門を担当しました。主に文具・電気製品などを担当しました。その後鹿大生協内に坂元さん（後に専務理事）を中心に「くらしを守る消費者の会」を立ち上げ地域に向けてスタートしました。

③地域生協づくりに向けて／鹿大生協を出て地域へ消費者の組織作りの拠点としてまず紫原地区に「くらしを守る消費者の会」の事務所と倉庫をつくりました。ここを中心に生協づくりをスタートさせました。共同購入を拡大推進することで市民にアピールしました。私は市内全域をカバーする米担当として共同購入を押し進めました。その中で組合員拡大をやりながら大きな目標である店舗づくりを目指しました。

④市民生協の拠点となる「店舗1号店」／市内紫原地区に待望の店舗1号店が誕生しました。私は「生協の店」の鮮魚担当第1号として鮮魚売り場に立ちました。当時店長は今は亡き大木勝臣君でした。鮮魚担当とは言え魚釣りはしていたが魚の名前も良く知らない状況でした。そこで自宅近くの知り合いの魚屋さんで特訓を受けました。朝5時前に起きて市場へ仕入れに行って店に戻ってから調理供給、大変な仕事ではあったけど、とても楽しいでした。

元職員

伊地知 光政

金を借りるのに苦労した話

1972年10月に1号店として売り場面積50坪の紫原店が誕生しました。この店を建設するのに、3,000万円の借入金が必要でした。

頼みにしていた金融機関に相談したら、創立したばかりの生協に3,000万円もの資金を貸し付けることは出来ないと冷たくあしらわれました。貸してもらえる金融機関さがしが始まり、初代専務の村山さん、常務の坂元さんの奮闘で県信用農協連から融資を受けられる事になりました。初年度供給高8,700万円、出資金は280万円の生協にとっての3,000万円は莫大な金額でした。前年度供給高の35%の借金をしようとするのですから。10年返済ではあったが年間300万円の元金プラス利息が計画通りに払えるか心配しました。借りる方が心配するぐらいだから貸す方はもっと大変だったと思います。保証人はたっぷり付けて欲しいとの話です。専務・常務の専従理事2人に理事長はじめ非常勤常務2人の合計5人の保証人をつけたのですが、それで足らず、当時くみあい米穀の専務をしておられた田原さんにお願いして保証人になって貰って3,000万円の借入をする事が出来ました。その後生協は急速に成長し計画より早く9年で返済できました。

元職員

尾上 紀美子

アッというまの29年間

1970年11月20日、私は生れて50日足らずの次女を連れて鹿大生協特販部？にパート職員として働きはじめました。当時は、「くらしを守る消費者の会」から「市民生協」設立総会に向けての準備の真っ最中でした。

配達から帰ってくる職員は商品代の集金や加入用紙、賛同署名など色々持って帰り、その整理が私の仕事でした。設立総会の日、来るわ来るわ「どこからこんなに主婦が出てくるんだろう？」と本当に驚きました。

それから後のことはもう多忙で色々なことが前後して記憶に残っている状態です。

1972年に正規職員に採用され組織担当になった時、組合員は2000人足らずで、地区はA～F・T・S・Yがあり、班は300班前後と記憶しています。班会を開いていただいてそこに参加するのが私の仕事。地区毎の運営委員会へも参加し、事あるごとに運営委員に電話。おかげで150人位の名前と電話番号全部を覚えた時期もありました。

「苦情と意見で成り立つのが生協」と班長会、班会では商品・配達に対する意見・苦情を漏らさず聞く、聞いて帰って内部に報告。その頃の組合員は私にとっては主婦の鑑で、価格に敏感、料理材料に厳しい目、物価に敏感（新聞代、国鉄、大学授業料等の値上げ反対署名にも取り組んだ）でした。

「我が家の暮らしを守るためにはみんなで力を寄せ合わなければならない」と身をもって実行する組合員の姿に自分ももっと頑張ろうとの思いで働いてきました。

アッというまの29年間でしたが私にとっては第2の青春時代でした。

元職員、協友会代表世話人

中村 寛成

生協移籍当時の追想

1976年3月、滑石生協（現ララコープ）から店舗研修のため鹿児島市民に出向してきました。出向と強調するのは、長崎で新しく店舗を作る時は必ず「呼びもどす」との約束で鹿児島に来たと理解しているからです。それが3年経っても、店舗展開を始める時にも「声」は無く鹿児島で定年、現在に至ります。

出向当時の情勢は、大阪万博後の高度経済成長のピークは過ぎたもののまだ高い成長率を維持していた時代、春闘では国労、私鉄のストで交通機関がストップすることも（生協も厳しく団交していた）。政治では、70年安保闘争、反戦運動（ベトナム戦争）、沖縄返還闘争など大きな運動が闘われたが、安保闘争は収束、ベトナム戦争は米軍の撤退、沖縄は返還された。これらの運動と結びついていた学生運動も下火になり、社会は安定化していった。この様な中で高度経済成長の負の部分、公害や食品の安全性（添加物）が大きく社会問題化し、自分にも「何かできるのでは、何かしなければ」の思いがあった様に思います。

1973年入協、きっかけは恩師の紹介。団地の駄菓子屋、八百屋さんだった様な貸家を3軒借りての営業、当然赤字。希望をなくした担当男子職員の急な退職によるその補充だった。長崎での3年間で最も記憶に残るのは鹿児島市民生協に出向する年の2月事務所の金庫が破られ全員指紋を取られる。（金の被害はなかったようだ）そして3月鹿児島市民へ出向。鹿児島でも数週間前、紫原の事務所の金庫が破られたと聞いた（なぜ、同時期に金のない生協の、金の入っていない金庫が破られ、指紋を取られたのか？私の謎）。

鹿児島に来た時、開店間もない谷山店を案内してもらい、真新しい大きな店にびっくり、こんな店で仕事をすることになるのかと感激したことを思いだします。店の周りは、まだ田圃が多く残っていました。

元職員、協友会世話人

小野　徹

懐かしき谷山店1号店、そこから始まったコープ人生

「いらっしゃいませ」「ありがとうございます」こんな大きな声で叫んだのは初めてでした。

私は、1975年に鹿児島大学生協に、九州工業大学生協から移籍してきました。そして、最初の大きな仕事が、谷山店の開店セールのお手伝いでした。店頭で100円雑貨を売っていたと思います。開店にこんなに多くの組合員さんが、行列を作って待ってくださっているのか、こんなに期待されているのかとびっくりしたものです。それと、地域生協の応援に、こんなに、大学生協がかかわるのか。それも驚いたものでした。それが、私と地域生協（当時は鹿児島市民生協でした）との最初の出会いでした。

その後3年間、鹿大生協で働き、鹿児島市民生協に移籍してきました。そして、最初に赴任したのが、谷山店の農産。先輩に教わりながら、農産というものを理解すること、商品を供給するということを教わること、毎日毎日が楽しさと大変さを学んでいきました。

その後、同じ谷山店の水産に移りました。この時期が、自分的には、一番大変だったかな？と思います。まず、魚の名前が分からない、魚が手になじまない。水産に来て、数週間立っていたと思うけど、先輩に「冷蔵庫から、アジを取ってきて」と言われても、さばとアジの見分けがつかない。一度恥をかいていたので、アジには後ろの方のおなかのところに、ぜいごがあるのを覚えていたので、その部分を触って、「あ、痛！」と思えば「これはアジだ」と見分けて、持って行ってました。早朝、魚市場に行き、仕入れてくれた魚を店に運ぶだけ。

なにも分からず、農産、水産の仕事をしていましたが、そこで、地域の生協とはどんなところなのか、コープの店とはどんなところなのか、組合員さんとの関わり方は？など大変勉強になった時期でした。

元職員、協友会世話人

濵田 マリ子

生協への関り50年、これからへの期待

生協コープかごしまの50周年を心からお喜びを申し上げます。

1971年4月、私は種子島の高校を卒業し、京都への憧れだけで、京都洛北生活協同組合（現：京都生協）に就職。偶然にもコープかごしまと、私の生協への関りは同じでした。生協のイロハも知らなかった私も50年の長きにわたって生協と関ってきたんだなあと感じています。京都で精肉部門の技術習得をしていた夫が2号店（谷山店）の開店計画に伴い、帰鹿したのは1974年4月でした。

1990年4月、夫が志半ばで亡くなり、私は9月にコープかごしまに入協し、21年間職員として勤務しました。総務・経理をはじめ労働組合専従、店舗と貴重な経験をさせて頂きました。仕事を通して感じたことは、「組合員さんあっての生協・職員あっての生協」という人と人との絆です。出資・利用・運営に参加して下さる組合員、その気持ちに応え自己研鑽に励む職員が両輪のごとく機能して、生協という組織の歯車が回っていくと思います。志布志店長で単身赴任した時は、店舗委員さん、常連の組合員さんに励まされ、何もわからない店長を支えてくれた職員に感謝しながらの日々でした。西陵店ではここに生協の店があったから自宅を建てたという声に、地域の期待を実感しました。

退職後に再雇用となり、障がい者雇用に関わりました。今50名以上の障がいを持つ仲間が生協で働いています。「働く喜び、社会貢献の喜び」を感じながら、自分らしく活き活きと人生を送ってほしいと願っています。

「よりよき生活と平和のために」「ひとりがみんなのために、みんながひとりのために」というスローガンが大好きです。一人一人が大事にされる世の中にしたいですね。生協がその志を大事にして、「暮らしやすい世の中に、平和な世の中に」の運動の中心にいて欲しいと強く期待します。

元職員、協友会世話人

児山 正志

県民生協とは具体的に何を、どこで、誰が？

1980年1月の臨時総代会で市民生協から県民生協へ拡げていくことが決定された。当時、職員間では具体的に何が変わるのか、漠然とした疑問と生協拡大への期待があったと思う。私には少し悪い予感があったようだ。当時、店舗は市内3店舗でまだ未成熟となれば共同購入で進出するに決まっている。鹿児島市の次に人口が多いのは鹿屋市8万人。次は川内市6万人。

大隅担当として鹿屋に赴任したのは六反宣道。当時小浜から吉野支所に通い、共同購入の経験も豊富な適任者と思えた。川内市には私が指名。いろいろあったが最終的には行くことにした。この時点で私は共同購入担当者としてはまだ1年余。長崎県からでてきて10年余だが鹿児島弁は聞き取れない。一番肝心の川内市の地理を全く知らない。どうしよう。

1980年4月からは毎日川内市へドライブ。市街地や住宅地、時には山道を走り回った。チラシも配った。戸別訪問もしたが最初の1か月は成果ゼロ。「せいきょうです」には「聖教新聞？」の時代。鹿屋の六反氏に毎日電話しました。青刷りFAXで文書もやり取り。その頃は競い合い、あえてライバルとすることでモチベーションを保っていたような。

配達もなかなかのもんでした。配達前日に鹿児島まで荷物を取りにゆき、帰ってから班別に仕分けし、届いた牛乳と合わせて配達。週一回の配達日が、組合員が増えると2回、3回と増え物流も整備されました。職員二人目の福宿君が来て鹿児島市に戻るときには4人の職員とプラットホームのある支所ができていました。

結局、鹿屋との競争は負けっぱなしで終わったのですが、亡き六反氏なら今回の依頼「県民生協づくりへの思いや随想」にどんなことを書くのだろうかちょっと見てみたい気もします。敗軍の将多くを語らずということでこのあたりでペンをおきます。謝謝

きずな強く、
広がる協同・連帯

生協コープかごしま50年は、多くの取引先や産直生産者の協力、
全国の生協や県内の協同組合との連帯による
多くの支援によって支えられた歴史でもありました。
生協との関りのエピソードや
これからへの期待などのメッセージをいただきました。

元・日本生協連九州支所長
石川 誠一

九州の地域生協づくりと鹿児島支援の雑感

コープかごしま。50周年おめでとう。4月1日が創立日と聞いて、楽しいですね。

50周年記念の自己紹介です。岩手県盛岡一高卒、東北大学に入学。学生理事、東北地連担当の常任理事。卒業後、東北大学生協の常勤専務就任。日生協にスカウトされ、28歳で指導部、県連担当、医療部会事務局長、厚生年金事業団担当など本部7年。

1969年九州支局長に。井川専務（故人）の言葉「九州は小さいが赤字続きでね、なんとかしてくれ」。3年後、関西支局長の島根善太郎さんが本部に戻る。井川専務の再度の言葉。後任には「君が良い。九州支所では良くやったね」。日生協は通算十三年でした。その後埼玉の大友弘己さん（故人）から声がかかり、埼玉中央市民生協に移り、県内合併して、全国5位のさいたまコープに。埼玉で生協の常勤生活一筋25年で終了しました。

九州で3年間で、何ができるかですが、各県毎の拠点生協を訪問して、よくまわって、話し込んで交流を深めました。経営指導、生協設立のすすめなど。ふくおか吉田さん、大分の藤本さん、熊本の山岡さん、宮崎の田中さん、鹿児島の石田さん・坂元さん、佐賀・長崎の弥永さん。この経過の中、九州生協協議会を舞台に、鹿児島から石田さんが専務になられ、トップ研や生協学校など、既存の生協の強化をはかりました。

沖縄には、石田さんと2人で占領下の「身分証明（パスポート）」を持って調査に行きました。新設立では、長崎のなめし団地、北九州のエフコープがありました。鹿児島はよく訪れて、経営相談や全国情勢などの話が多かったと思います。桜島もよく見ましたね。福岡では太宰府天満宮、大濠公園ですね。最後にコープかごしまの更なる発展を期待してペンを止めます。コープみらいを見守って。

（最終生協歴　さいたまコープ名誉会長・日生協非常勤副会長）

元鹿児島県農協中央会
常務理事
原口 正夫

九州の地域生協づくりと鹿児島支援の雑感

「より良い生活と平和のために」鹿大生協で活動していたころ、同志の石田静男さんは大学生協から市民生協へ、私は農協へそれぞれ転進しました。

戦後、資本主義の矛盾が拡大する中で協同組合社会の実現に向って少しでも生活を安定させたいという思いで活動してきました。

生協との連携で思い出すのは昭和52年、私がえい農協（南九州頴娃町）にいた頃、コープかごしまの坂元さんがみえて「コガネセンガン」を青果用として札幌市民生協に送りたいと相談がありました。

私はえい農協の青果用甘しょ部会に出荷の協力をお願いしました。当時「コガネセンガン」は澱粉用として生産されていたもので農家の意識を統一して出荷に成功し、東北の生協よりお礼状をいただいたことを思い出します。

鹿児島県では協同組合協議会が設置されており、日常的に協力関係を作っていました。平成4年11月ICA東京大会記念文化企画「前進座怒る富士」全国巡回公演が設定されたときに、鹿児島市でも公演したいと申し出て、協同組合関係実行委員会を組織して、公演準備に取りかかりました。県民センター（宝山ホール）を会場にチケットの販売に取り組み、大成功した時の気持ちの高ぶりを90歳を目前にしてもしっかりとまぶたに浮かんできます。

「1人は万人のために、万人は1人のために」という協同組合の人の絆の素晴らしさを今日まで持ち続けています。

10年位前に生協OBの坂元義範さんから生協の個別配達の事をお聞きしてすぐに申し込みました。高齢で身体の自由が失われつつある今日、生活必需品の個別配達は本当に助かります。感謝のほかありません。今後ともよろしくお願い申し上げます。

元鹿児島県信用農協連
常務理事
八幡 正則

「生協コープかごしま」発祥のころの思い出

創立50周年おめでとうございます。

生協との付き合いは、鹿大教授の上村剛一さんから「こんど大学生協が支援して市民生協をつくるので、よろしく」と言われたことに始まります。私が農協中央会に居るときです。私ども協同組合運動を志す者にとって、ロッチデール組合のものや賀川豊彦さんの『乳と蜜の流るゝ郷』とか本位田祥男さんの『消費組合』は必読書でしたから、生協運動には強い関心がありました。農協連にも大学生協体験者が居りましたので、生協設立発起の人々と早くから交流がありました。私は早速家内とともに近所の奥さん方に話しかけ、吉野町早馬で牛乳を飲もうと共同購入の班を立ち上げました。

生協設立発起の方々に、会議の際は農協連の会議室をどうぞー、といい、職員新採用にも協力しました。また教育研修に農協教育センターを利用するようにとか、米の取り扱いもあって経済連別会社「パールライス」の専務をコープの理事にしてもらったりしました。

忘れられない思い出の一つに、県農協中央会が主催した農畜産物輸入反対緊急集会の一幕があります。来賓で先に登壇して連帯の挨拶をした生協の久木田幸子理事長に対し、山中貞則代議士が「帰っていただきたい。連帯とは何事か。社会党左派や共産党の言葉だ」と露骨に言いました。久木田さんは、「私はこの農畜産物輸入自由化反対の集会に招かれて参加しています。私たち消費者は食糧の安全と安定供給を望んでおり、食糧自給率の向上をめざして生産者の皆さんとともに連帯して運動をすすめていきます」と静かな口調ながら毅然として言われたのが強烈な印象として残っています。

今や生協組合員数は農協を上回ります。さらなる連帯を祈ります。

生協コープかごしま
虹友会会長
（セイカ食品株式会社 代表取締役社長）
玉川 浩一郎

生協コープかごしま様の栄えある50周年に寄せて

生活協同組合コープかごしま様におかれましては、益々ご隆盛の事と慶賀の至りに存じます。平素よりお取引を通じ、格別のご厚情に与かっておりますコープかごしま虹友会を代表しご挨拶を申し上げます。

このたび、生活協同組合コープかごしま様が、めでたく創立50周年をお迎えになられるとのこと、心からお祝い申し上げます。

ご創業以来、歴代の役職員各位、組合員の皆様のご研鑽により、鹿児島県民の豊かで潤いのある生活の実現に多大なるご貢献をされてこられた事に深甚なる敬意を表する次第です。

また、日頃より虹友会の活動に、積極的なご支援とご指導を賜っておりますことに、重ねての御礼を申し上げます。

お取引を頂戴しているものとして、お得意先の記念すべき50周年を一緒にお祝いさせて頂ける事は大変嬉しく、光栄に存じる次第です。

「暖簾は革新」とも言われます。コープかごしま様が、栄えある50周年を機に、永年にわたり、県民から獲得されて来られた厚い信用と、信頼を基とし、新たなお取り組みや、多彩な事業を通じ、更にご発展されます事を確信致しております。

虹友会会員は、研修会・勉強会・視察等を通じ、日々のお取引の先にある、協同組合運動の本質をよく理解し、「共通の経済的・社会的・文化的ニーズと願いを満たす」という「協同組合の定義」の具現化を更に図るべく、一層精進してまいります。どうか今後とも虹友会会員に対し、変わらぬお引き立てを賜りますようお願い申し上げます。

末筆ながら、生活協同組合コープかごしま様のご隆盛と組合員各位のご健勝を祈念申し上げ、甚だ略儀ではございますが、お祝いに代えさせて頂きます。

元・南日本酪農協同株式会社
代表取締役社長

檀上 昌也

牛乳昔話

【その1】
「生協は牛乳から始まった」これは坂元さんからよく聞かされました。「南酪は、生産者の切実な思いの結晶です」。1962年7月、南酪（南日本酪農協同・株）田中繁隆工場長は、正面に居並ぶ鹿大生協の理事連に話し始めた。「絞った牛乳を自ら売る100％酪農家出資の会社です。皆さんは消費者組織で、私達は牛乳生産者組織。消費者の暮しを守る、牛乳生産を守る、思いは同じです。」

本社を都城市に置く南酪が、鹿児島市に営業所を開いたのを機に、鹿大生協はデーリィ牛乳を売ることに。牛乳生産者による処理販売と、消費者組織の理念が合致。然し、組合員の暮らしを守る立場と酪農生産の安定を目指す者との折渉は生易しいことではなかった。※当時の納入価格：1合瓶（180cc）生協13円／一般市乳15円※生協15周年祝賀会で田中繁隆の祝辞「南酪は生協によって育てられました」

【その2】
コープ牛乳誕生。1971年に輸入飼料高騰による原料乳の値上がりから、生協への納入を1合瓶5円の値上げを申し入れ。生協で第2の主食と呼ぶ程大切な牛乳。交渉が難航する中で、乳成分表に眼を通していた坂元常務が「田中さん、今の3.0％牛乳を、3.2％に出来ませんか。品質が上がれば最低限の値上げはやむを得ないことです」受け入れるには、産地指定や飼料チェック、クーラーステーションの整備が必要。田中は悩んだ末に受け入れた。2ヶ月かけて1本3円の値上げに併せ、新たに「コープ牛乳」が誕生した。「組合員の暮らしを守る」絶対の大義にも、生協の見学者を迎えた、酪農主婦の呟きが届いたのか。「わしらァ暗リャーうちから起きて、ドロンコで牛の世話ァする。日曜も祭日もない。組合員さんたちゃァきれェな服着てネックレスなんか付け、そン人たちン暮らしゅう守れチ言われてン・・・・」

前・立石食品株式会社
代表取締役社長

立石 数統

コープ商品づくり

“疾風に勁草を知る”組合員様はライバルであり、大切なパートナーであるという考えを礎に食の安全と品質の追求に努めて参りました。

組合員様に安心してお召し上がり戴き、安全であるさつまあげを創り組合員様に喜んで戴けるさつまあげを創ることが立石食品の使命だと考えております。

その為には主原料の魚肉すり身は、重合リン酸塩や保存料を使わずに作ったすり身の調達からです。まずは、魚を知るところから始めます。その為に実際にすり身の製造を委託している工場へ、国内はもちろんアラスカ・タイ・ミャンマーなどに定期的に訪問し、市場の水揚げの状況や魚の鮮度や身質を見てそれに応じて「この魚はしっとり感が強く、この魚はもちもちとした食感がある」「この魚を加えるとお魚の風味がぐんと高まる」など魚の種類が違えば食感も味も変わります。それだけではなく、同じ種類でも季節や育った海の環境が違うと全く異なる肉質になります。

例えば北海道のスケソウタラは冬の寒い時期物しか使いません。私たちはそのお魚ごとの特徴を知り、素材が活きるような商品を創るために、その時期の最適なお魚の個性を理解して数種類の魚をブレンドして、組合員様に喜んで戴けるさつまあげの食感や風味を作り出しています。

常に立石食品ではお魚がもつ本来の味わいや食感を生かしたさつまあげを創ろうと考えています。四十数年前、コープかごしま様（当時の市民生協かごしま）の商品を創る事から始まりました。当然のことながら無添加の商品造りでございました。それ以来、無添加一筋を貫き現在は日本生活連合様のＰＢをはじめとする全国各地の生協様に商品をご愛顧戴いております。今後も組合員様やその大切なご家族に安心して食べて頂ける商品づくりを続けて参ります。

元・鹿児島パールライス
株式会社
代表取締役専務
川原　巌

生協との思い出
～米を供給する使命と共に～

鹿児島パールライス（株）を退いてはや25年、当時の資料を紐解き、思い出や生協との関りを綴りたいと思います。個人的な来歴を振り返りますと、鹿児島パールライス（株）で平成5年から9年まで代表取締役専務、その後2年間相談役を務めました。その間で最も印象深い出来事は、平成5年の戦後最悪と言われる米の大凶作でした。食糧管理制度（国が米や麦等の価格や供給量を管理する制度）が厳しく敷かれていた時代です。国産米の供給が厳しい状態になることが見込まれましたので、私は他県の米を手配するなどして奔走し、米穀年度切換前に生協の組合員をはじめとする消費者の方々へ供給する米を確保することができました。取引先や仲間の協力があって実現したことであり、私の人生の中で忘れられない思い出となっています。

また、生協との関りの深い出来事で印象深いのは、平成8年の無洗米精米機導入です。共稼ぎ世帯が増え、核家族化も進み、手間のかからない無洗米が求められる時代になると予測して導入を決意しました。とぎ汁を出さない製法であることから、環境保護の点からも意義があると考えました。生協は環境保全活動を長く続けておられたので理解も深く、無洗米をすぐに受け入れていただきました。生協内では組合員から募った「とがんまい」というネーミングで浸透し、現在では多くの支持をいただく商品に成長しました。

私も現役時代に心掛けていたことですが、常に消費者の視点で物事を考えることが大切だと思います。生協も組合員の意見をもとに成り立つ組織です。これからもその視点を守りながら暮らしを守る組織として、ますますのご発展を祈念いたします。

SB&B社 代表
ボブ・シナー

Dear Coop Kagoshima,

SB&B社のパートナーとスタッフ、それから私の家族を代表して、生協コープかごしま様の50周年を心からお祝い申し上げます。

30年近く前、私は当社（SB&B社）を生協コープかごしま様のリーダーの方々や多くの女性理事様たちに紹介させて頂く機会に恵まれ、また光栄にも皆様とお会いすることができました。生協コープかごしまの元理事長である坂元様は、アメリカのサプライヤーと生協の組合員を結びつけるという考えに真っ先に賛同し、歓迎して下さいました。この結びつきは後にとても重要なものとなり、また長きに渡り続くこととなりました。

私は自分とAG-CAL JAPANの清水社長と坂元元理事長が最初に会合を持った時のことと、その時SB&B社が日本の生協に対し食用品質の大豆を提供するという考えを提案させてもらえたことをどれほど光栄に感じたかをよく覚えています。また、その会合の論点が真っ先に全てのサプライヤーが守らなければならない厳格な食品安全性ガイドラインについて焦点されたことをはっきりと覚えています。

何年もの月日が流れましたが、その間の私にとって最も思い出深い一時の多くは、生協の女性理事様たちとの交流でした。彼女たちの質問は大変的確であり、また彼女たちの質問の仕方は、彼女たちの学習への意欲、そして日本の消費者が、食の需要を満たすために他国に頼らねばならないという重大な現実を私に深く刻み込んでくれました。

鹿児島の女性たちはよく独創的な大豆食品料理を色々と用意してくれました。私たちは共にそれらを味わうという堅苦しくなくフレンドリー方法で自分たちの繋がりを強めてきました。私はそうした出会いをいつもありがたく思っていましたし、また楽しみにしてもいました。ノースダコタ州の本社にある私のオフィスには、生協コープかごしま様に関する大きなファイルが保管されているのですが、その中には多くの忘れがたき写真だけではなく、皆様からの数え切れないほどのメッセージが含まれており、皆様が私たちの大豆から作られた豆腐をどれほど美味しく食べて下さったか、そしてそれらに満足して下さったことを伝えてくれています。

最後になりますが、私たちは皆、生協コープかごしま様のような素晴らしい組織と繋がりを持っていることに心から感謝していることを知って頂ければとても有難く思います。これからも共にこのビジネスを成功させ、そして50年後にまた生協コープかごしま様をお祝いできることを、一同楽しみにしております。

服部菜園（産直野菜生産者）

服部 佑弘

僕と生協産直とのなれそめ、そして今

コープかごしまとの出会いは、僕が34歳で結婚して数年、子供達が未だ小学校に上がらぬ…従って40歳になるかならぬかぐらいであったかと記憶します。

一方生協もその頃は「かごしま県民生協」と称していました。実はその頃は経営規模の大型化を計り、着々と前進させ、着々と赤字を賑わせていました。そんな時、(有)大隅農畜産協同センターから声がかかりました。そのグループは養豚・採卵鶏・養鰻生産者で構成され「大隅産直」を標榜して全国の生協・スーパー他流通業者等に生産物を直販供給する目的を持った企業で、取引相手の中で地元「かごしま県民生協」から農産品（野菜）の要望があるという話でした。僕は勿論「OK」しました。と言うのも青果物卸売市場を介した販売（当時殆どを頼っていた）に理不尽さと大いなる疑念を抱いていたからです。コープかごしま初期の産直交流会で発表、その事を申し述べた記憶があります。これを機に「センター」の他にも「かごしま組合食品等」の仲介を得て他生協・スーパー等とも「こだわり商品」扱いの商談で値決め、その他条件を整えて販売が出来たのは、その後の経営安定化に寄与してくれました。

子供達（3人）が大学進学する頃は最悪でした。返済の為の借金、借り替えと最悪のパターン。でも良くしたもの？で長男、次男の2人は新聞配達で（奨学金を得てなお不足する部分の）学費を稼ぎ、更に第3子の長女進学の折には長男が既に就職していて「僕が出してやる」と希望大学に進学させることができました。その後、借金完済。反面、貯えは全くなく、スリルを楽しみながら生きております。所詮終活も基本線は定まり、今では死後どのように供養を行うか――親子で和やかに話し合っております。

終わりになり恐縮ですが、この度は50周年おめでとうございます。

杉村農園（産直野菜生産者）

杉村 栄治

産直農家の一員として

私の農業の歩みを簡単に紹介し「コープかごしま」の産直生産者に認めて頂いた経緯について述べたいと思います。

1960年熊本県芦北町から現地の離農された方の農地を買い、山奥での生活が60年となります。当初は電気もなく、ランプ生活が約5年、富農を目指し、汗を流して働いたものです。しかし猪の被害で3年間無収入、当初の計画のさつま芋を主に養豚、甘夏の複合経営の夢が崩れ、野菜を主に甘夏、温州みかんの経営となりました。

1950年頃、公害が全国各地で発生、特に隣の市の水俣で水俣病が公害病として、大きく報道され、支援者が大勢訪れ、定住し水俣病患者の農業、漁業を手伝いしながら、無農薬の甘夏みかんを全国各地に発送して、患者家族の生活を支えていた人達と知り合いとなり、彼等に誘われるままに有機農業に方向転換して今日に至っている次第です。

1980年頃より「コープかごしま」の産直生産者として認めて頂き約40年お世話になっております。旬の野菜、露地野菜で昔ながらの百姓です。

これからも私としては一番良い旬の野菜、日光を充分に受けた露地野菜で消費者の皆さんの健康を守って行きたいと思っています。

産直で一番大事な事はお互いの信頼関係かと思います。その点からも「いつでも」自由に農場の野菜を見届けて下さい。

幸か不幸か息子が有機農業で生きて行く決心をしている様です。温かく見守って下さい。

霧島ビーフ農業協同組合
代表理事
大丸 米蔵

創立50周年に寄せて

この度は、生活協同組合コープかごしまが創立50周年を迎えられ、記念誌を刊行されますことを心よりお慶び申し上げます。

貴組合は、地域に根差した消費者の組織として、1971年4月に設立されました。貴組合と我々霧島ビーフ農業協同組合は、1992年から産直牛の供給提携を継続しております。我々は生産者と組合員（消費者）の皆様との架け橋となるべく、産地見学としての牧場訪問・試食会・推奨活動・意見交換会等々、つながりを深める活動を積極的に展開して今日の事業継続に繋がっております。

生産開始当時は、乳用種であるホルスタイン雄牛の肥育への応用は前例も少なく、納得のいく肥育、安定的な品質を維持するために、試行錯誤の辛い日々でした。生協の「産直」は、単なる「産地直送」や「産地直売」ではなく、生産者と消費者の顔が見える「産地直結」の活動として「安全・安心」な商品作りの追求との理念に共感し、「おいしい牛肉を多くの方に食べてほしい」と日々愛情をもって飼育しております。

牧草のほとんどを自家生産するなど、耕畜連携による循環型畜産体制にも取り組み近隣の耕作地を引き受けるなど、自給粗飼料面積も拡大してきました。しかしながら、現在、畜産業をはじめとした日本の農業を取り巻く環境は食の選択肢の拡大による輸入品の台頭、担い手不足、感染症対策、温暖化による異常気象など様々な課題に直面しております。

我々生産者は、これまでにもいくつもの苦難を乗り越えて現在に至っております。今後も様々な問題に真摯に取り組み、消費者の皆様に“選ばれる”“愛される”そんな産直牛を生産し続けるため、更なる高みを目指して努力を続けていきたいと思います。

結びに、これからも貴組合がますます発展されますことを、心から祈念しお祝いの言葉といたします。

産直黒豚生産者
牛留 道夫

食卓に笑顔があふれる黒豚を作るために心を込めて・・・

生協コープかごしま創立50周年おめでとうございます。

これも、組合員や職員の皆様の長きにわたる活動、取り組みの賜物だと思います。このようなタイミングに生協コープかごしまと「かごしま黒豚」の産直取り組みができていることを思えば、私自身もついつい笑顔がこぼれてしまいます。

「産直黒豚」の取り組みは早いもので20年以上になり、現在、柿元さん、竹之内さん、小濱さん、そして私の4件で「産直黒豚」を皆さんの食卓にお届けしております。

4名とも、安心・安全・美味をテーマに、日々の飼養管理に努めており、豚は非常にきれい好きで病気に弱いため、私たち生産者も豚の目線に合わせて、声をかけながら健康状態などを確認しております。

健康で元気に育った黒豚は甘みがあって歯ごたえもよく、とっても美味しいです。

その元気に育った黒豚を誕生祭や推奨活動を通じて組合員のみなさんに試食してもらい、会話をすることが私たち4人の元気の源になっております。

今年は、新型コロナウイルスの影響で開催できませんでしたが、組合員や店舗スタッフのみなさんと、バーベキューを実施したりして交流を図るのも私たちの楽しみです。

これからも生協コープかごしまの今後の発展の一翼を「産直黒豚会」がお手伝いできればと思っております。

最後になりますが、「食卓に笑顔があふれる黒豚を作るために心をこめて」生産者4名でこれからも美味しい黒豚作りに頑張ってまいりたいと思います。